

《その他》

新型コロナウイルス感染症に伴う介護老人保健施設実習の 実践内容と課題

池俣 志帆, 坂 恒彦, 堀口 久子, 生田 美智子, 宇佐美 久枝, 粥川 早苗

椋山女学園大学看護学部

I. はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大によって、臨地実習が困難となり、さまざまな変更をすることが求められた(坂井, 熊野&太田 2021)。本学部の慢性期成人老年看護学実習では、3年次後期から4年次前期にかけて、3週間の病院実習と1週間の介護老人保健施設での実習(以下施設実習)が設定されている。ここでは、慢性期成人老年看護学実習の内、施設実習の学内実習及び遠隔での課題学習実習等(以下、遠隔実習とする)に焦点を当て、コロナ禍における実践内容や課題について報告する。

2020年度後期からの施設実習では、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、施設より臨地実習受け入れ中止の要請があり、実習施設の代替えが困難であったことから、臨地実習を実施することが難しい状況となり、約半数の対象学生が臨地実習から学内実習・遠隔実習へと変更した。学内実習・遠隔実習へ変更となったことに伴い、実習目標の達成に向けて、実習内容の検討が必要であった。文部科学省、厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」によると、臨地実習を学内での演習により代替する場合は、可能な限り臨地に近い状況の設定をし、演習を行うこと、とされている(2020)。2020年度に実施した施設実習の学内実習・遠隔実習の実践内容について報告すると共に課題を明らかにし、今後の施設実習への示唆を得ることとする。

II. 施設実習の概要

1. 慢性期成人老年看護学実習の実習目的

慢性期成人老年看護学実習では、慢性疾患・慢性病をもつ成人・高齢者の健康問題・加齢現象および発達課題に対して、成人期から老年期の移行に伴う身体的・精神的・社会的反応と経験に関しても焦点をあてることによって、つながりを学ぶとともに違いを理解し、対象者のニーズに対応した看護の基礎的実践能力を育成することとしている。

2. 施設実習の実習目標

施設実習の実習目標は、1) 高齢者とその家族に対して、援助的人間関係を築くことができる、(1) 高齢者の生活史・価値観に目を向け尊厳を支える態度がとれる、(2) 高齢者に関心を示し、話を聞くことができる、(3) 高齢者の行動や発言の意味を考え、コミュニケーションスキルを工

夫して関わることができる、(4) 高齢者を支援する(と関わる)様々な場面で生じた自分の感情や、思いがコミュニケーションの発展にもたらす影響を説明できる、2) 高齢者の生活機能の障害が、高齢者の発達課題や家族機能にもたらす影響を説明できる、(1) 老化や障害の個別性を説明できる、(2) 老化や障害による機能の変化が及ぼす生活機能への影響を説明できる、(3) 生活機能の障害を持ちながら抱えている、個々の課題や対人関係(家族機能)に対する思いに触れることができる、3) さまざまな健康障害で生活を営んでいる高齢者への看護のあり方を考察できる、(1) 施設的环境が高齢者のQOLに及ぼす影響を説明できる、(2) 高齢者の生活機能や課題に向けた支援を考察することができる、(3) 高齢者の全人的な健康とは何かを考察することができる、(4) 保健医療福祉システムの理解を深めて、他職種との連携・協働のあり方や看護の役割を考察することができる、(5) 地域や家族や病院など様々な機関との連携の在り方を考察することができる、としているが、臨地実習が学内実習や遠隔実習となったことで、「実施できる」あるいは「実践できる」といった実習目標を、「記述できる」あるいは「説明できる」へ変更した。

3. 実習内容

1) 臨地実習の実践内容

臨地での施設実習では、1週間の実習期間の内4日間を、介護老人保健施設における通所リハビリテーション(以下、デイケアとする)あるいは入所されている高齢者を対象とした実習を通して、施設で生活する高齢者の療養生活や日常生活の支援、看護を見学、または臨地実習指導者と共に看護実践の一部を実施している。フロア内での多職種カンファレンスにも参加した際には、施設における看護師の役割についても知識を得ている。また、学生は高齢者とのコミュニケーション場面を取り上げ、高齢者の言動や反応、自己の言動についてプロセスレコードを用いて、考察も行っている。実習最終日は、臨地実習で学んだことを共有するため、学内にてグループワーク、発表会を実施している。

2) 学内実習・遠隔実習の実践内容

従来の臨地実習で学生が経験する高齢者とのコミュニケーションや、高齢者の看護実践場면을想定し、学内実習の内容を検討し、実施した(表1)。

実習1日目午前中では、事例を基に構成されている認知症高齢者の体験世界に関するDVD(シルバークンネル, 2013)を視聴し、(1) 認知症高齢者の人が体験している世界とは、どのようなものであったか、(2) 認知症高齢者へのコミュニケーションにおいて、どのような点に留意する必要があると考えたか、(3) 認知症高齢者への看護において、どのような点に留意する必要があるか、の3点について、各自で記録にまとめた。実習1日目午後からは、教員が認知症高齢者役となり、各学生とロールプレイを行った(表2)。学生は、「家に帰りたい」と繰り返し訴えがある認知症高齢者への対応場面から高齢者の行動や言動の意味を考え、コミュニケーションスキルを活用しながら関わる、という実践を行った。学生とのロールプレイ後、教員は学生へ関りがどのようであったかその場で学生へフィードバックをした。その後、学生はこの認知症高齢者とのコミュニケーション場面について、プロセスレコードに記入をし、振り返りを実施した。

実習2日目では、施設で生活する高齢者と学生(いずれも教員が演じた)とのコミュニケーション場面の動画を各自で視聴した。1つ目のコミュニケーション場面では、学生が高齢者に自己紹介をするが、高齢者にうまく伝わらず、コミュニケーションが円滑に進んでいない場面である(写真1)。その上で、(1) 高齢者と学生にはどのようなことが生じていると読み取ることができるか、

表1 学内実習・遠隔実習の実践内容

実習日数	午前	午後
実習1日目	<ul style="list-style-type: none"> 施設実習オリエンテーションを受ける(多職種連携に関する文献の配布). 認知症高齢者の体験世界に関するDVDを視聴する. 認知症高齢者の理解と看護に関して記録にまとめる. 	<ul style="list-style-type: none"> 学生1名, 教員1名とで認知症高齢者の事例を用いたロールプレイを実施する. ロールプレイ後に学生と教員とで振り返りの実施. ロールプレイの場面をプロセスレコードに記入する.
実習2日目	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活する高齢者と学生とのコミュニケーション場面の動画(教員による作成)を視聴し, 対応方法等を記録用紙にまとめる. 施設で生活する高齢者と学生, 施設職員とのコミュニケーション場面の動画(教員による作成)を視聴し, 対応方法を記録用紙にまとめる. 動画内容から各自がテーマを見つけて, 参考書等で調べてまとめる. 実習状況や1日の振り返りを教員, 学生とで行う. 	
実習3日目	<ul style="list-style-type: none"> 実習1日目に配布した多職種連携に関する文献を用いて, 介護老人保健施設における看護師の役割や他職種との連携の実際について教員が説明する. 実習2日目に視聴した動画内容からの気づきや学び, また個人で調べた内容についてグループで話し合い, 共有する. グループ発表を行う. 	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活する高齢者の演習事例を基に, 食事, 排泄, 入浴場面に関するアセスメント内容や看護援助内容を記録する.
実習4日目	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活する高齢者の演習事例を基に, 食事, 排泄, 入浴場面に関するアセスメント内容や看護援助内容を記録する. 学生からの質問に教員が対応する. 	<ul style="list-style-type: none"> 各グループで遠隔にてグループワークを行い, 教員も各グループワークを聴講する. グループ毎に発表スライドを作成, 教員へ提出する.
実習5日目	<ul style="list-style-type: none"> 施設実習記録のまとめを行う. 施設実習発表の準備を行う. 	<ul style="list-style-type: none"> 施設実習発表会を行う. 教員からの講評を行う.



写真1 施設で生活する高齢者と学生（いずれも教員）とのコミュニケーション動画の一場面



写真2 施設で生活する高齢者と学生、看護職員（いずれも教員）のコミュニケーション動画の一場面

(2)事例の学生である場合、どのように対応をするか、各自で記録にまとめた。2つ目の場面では、痛みを訴えている高齢者に学生が声をかけるが、高齢者の気持ちをうまく汲み取ることができず、高齢者がイライラしている。そこへ日頃から関わっている看護職員が高齢者に話しかけ、高齢者の気持ちが落ち着いてくる場面である(写真2)。そして、(1)高齢者と学生にはどのようなことが生じていると読み取ることができるか、(2)事例の学生である場合、どのように対応をするか、を各自で記録にまとめた。その後、2つの場面を通して、学生個々が自身のテーマを見つけ、それについて調べて記録にまとめた。

実習3日目午前には、多職種連携に関する文献と老年看護学の教科書を用いて、介護老人保健施設の特徴、施設における看護師の役割を教員が説明した。その後、実習2日目に視聴したコミュニケーション場面の動画についての自己の考えを、グループ内で共有し、発表を行った。実習3日目午後からは、90歳代女性の事例情報を基に、食事場面、排泄場面、入浴場面について、アセスメントや看護援助の方法を記録にまとめた。

実習4日目午前には、3日目午後から引き続き、事例情報を基に、食事場面、排泄場面、入浴場面について、アセスメントや看護援助の方法を記録にまとめた。実習4日目午後は、(1)高齢者の身体的特徴、精神的特徴、社会的特徴がどのようなようであったか、(2)(1)で捉えた高齢者に対して、どのような関わりができるか、どのような日常生活の支援が出来るか、(3)プロセスレコードを振り返り、高齢者とのコミュニケーションにおいて感じたことや考えたことは何か、(4)さまざまな健康障害で生活を営んでいる高齢者へどのような看護を実践していくのか、について、各グループで意見をまとめた。これらの遠隔実習にはGoogle Classroomによるオンラインの学習支援サービスを活用し、グループ内での共有やグループワークにはZoomやGoogle Meetを利用した。

実習5日目午前には、施設実習全体を通しての記録のまとめと発表準備、午後からはグループ毎に代表者1名が(1)～(4)の視点について発表を行った。

表2 認知症高齢者のロールプレイ事例(一部抜粋)

事例
<ul style="list-style-type: none"> ・Aさん、70歳代女性。介護老人保健施設へ入所後1週間が経過した。 ・ADLはほぼ自立している。 ・手先を動かすことは好き。 ・もともとお話が好きで、一人になると寂しいと訴える。「家に帰りたい」との訴えがある。
場面設定
<p>Aさんが入所しているフロアで実習をすることとなった。</p> <p>Aさんがデイルームで塗り絵を行っている。Aさんに塗り絵を見せてもらおうと思い、声をかける。Aさんと学生は、塗り絵をしながら話をしていたが、「家に帰りたい」と、帰宅願望の訴えが強くなった。学生は対応に困っている。</p>
課題
<p>Aさんの行動や発言の意味を考え、コミュニケーションスキルを工夫しながら関わる。</p>

Ⅲ. 実習内容の考察と今後の課題

実習内容として取り入れた、認知症高齢者の体験世界に関するDVD視聴や、施設で生活する高齢者と学生のコミュニケーション場面の動画、また、認知症高齢者の事例を基にしたロールプレイを通して、高齢者への理解や、高齢者とのコミュニケーション方法の工夫といった点で、各自が考えることができた。これらによって、学生が高齢者の体験世界をイメージすることや、高齢者の生活や看護を考える一助となったのではないと思われる（坪井他, 2020）。また、各自の学びをまとめた上で、グループワークにて考えを共有することができ、共通した事例であったことからお互いの考えを深めていきやすかったように考える。個人の経験をグループで共有することは、学生の思考過程を広げたり深めたりすることができ、学内実習の強みとなるが（安酸, 2020）、グループワークやディスカッションの時間は臨地実習よりも持つことができた。須田らの報告では、学内実習において介護老人保健施設に関する映像視聴によって、学生が施設の実際や高齢者との関りをイメージでき、グループワークや積極的な学習につなげることができた（2021）、としている。映像を伴う模擬事例の活用は、文字情報だけのときよりも、高齢者の様子をより学生がイメージしやすい（松岡, 2021）、とあり、やはりできるだけ映像も最大限活用することが必要となる。実習3日目午後からの、施設で生活する高齢者の演習事例では、文字情報が中心であったことから、日常生活場面をアセスメントし、看護援助内容を考えるための情報提供として、映像でも見せていくことや、個人ワークでとどまらず、グループワークやディスカッションをする機会を作ることを検討したい。

今回、学内実習・遠隔実習では、施設で生活する高齢者への看護援助の実際や、多職種連携の実際を事例や文献を通して学修したが、実習5日目の学びの発表において、臨地実習グループの学生と比較して、これらの点について学生が具体例を挙げづらく、困難を生じていた。学生が施設の実際や、施設で生活する高齢者をイメージすることで、高齢者の理解につながると考えられるため、教科書や文献のみならず、臨床により近い、例えば施設実習指導者からの施設概要の説明、動画や写真の十分な活用、また高齢者の特徴を具体的に捉えられるように、施設実習指導者による遠隔での講義や意見交換の場の設定、施設利用者との遠隔でのコミュニケーションの機会を得る、といった工夫や調整も求められる。坪井らは、特別養護老人ホームのデイサービスを利用する高齢者とのZOOMでの交流を実施し、高齢者と学生双方の音声の聴き取りづらさや、高齢者の表情や反応が読み取りづらい等のオンライン上での難しさもあったが、高齢者が自ら現在の生活や思い、これまでの人生経験を語ってくれた、としている（2020）。施設実習では、デイケアに通う高齢者であれば、生活や思いを語ってくれる対象があるかもしれないが、同時にこれによる対象者への負担や及ぼす影響も加味しなければならない。

田端らによると、学内実習での学びの特徴として、学生が自ら高齢者となって援助を受ける体験をすることで、看護者や高齢者の両方の視点から考えを深めることができた、とされている（2020）。今回は高齢者役を教員が実施したが、学生が高齢者役をすることで高齢者の立場になって考え、またそれが看護実践へと活かされることが期待されるため、学生を高齢者としたロールプレイや看護実践についても、取り入れていくことを課題とする。

各地の高齢者介護施設、デイサービスにおけるクラスター発生の報道がされ、認知症の利用者へのマスク着用の徹底が難しい、との指摘もある（記村, 梅垣, 廣瀬, 2020）。今後の施設実習においても、臨地実習はもとより、いつ学内実習・遠隔実習へ代替しなければならない事態が来

るかもしれない。安酸によると、臨地実習の代替策を検討する際に必要なこととして、学生の関与と動機づけを促進するような代替策であること（2020）、としている。できる限り臨地で学修できる内容をどのようにしたら学内で学ぶことができるか、どのような工夫をすれば学習効果上がるのか、これらを念頭に組み組んでいきたい。また、学生の学習状況を評価していくことも同時に必要であり、今後の課題である。

IV. おわりに

2020年度、慢性期成人老年看護学実習の施設実習において、学内実習・遠隔実習を実践し、できるだけ臨地実習に近い学修ができるよう、施設で生活する高齢者の事例を用いることや、ロールプレイ形式での認知症高齢者とのコミュニケーションの実践といった内容で施設実習を行った。しかし、施設で生活する高齢者への看護援助の実際や、多職種連携の実際については、具体的な臨床をイメージできる実習内容の工夫がより求められることがわかった。今後は、臨地実習のように施設実習指導者からの指導や説明の機会を得られるような設定、施設で生活する高齢者の看護援助の実際では、事例の文字情報のみではなく視聴覚教材を活用し、臨地をイメージして学修できるような設定をし、学内実習の実践内容を工夫していかなければならない。また、学生の学習効果上がるような工夫ができていくかを評価することも必要である。

文献

- 記村聡子, 梅垣弘子, 廣瀬忍. (2020). 新型コロナウイルス感染症流行下における老年看護学実習の検討－「地域で暮らす高齢者への看護」を学ぶ学内代替実習プログラム, 四條畷学園大学看護ジャーナル, 4, 23-29.
- 松岡千代. (2021). 学内実習の取り組みから得られた臨地実習への示唆, 老年看護学, 26 (1), 39-40.
- 文部科学省, 厚生労働省. (2020.6.22). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について, <https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf>. (2021.9.28閲覧)
- 坂井志麻, 熊野奈津美, 太田淳子, 他. (2021). コロナ禍での老年看護学教育のチャレンジ, 老年看護学, 26 (1), 41-43.
- シルバーチャンネル. (2013). 認知症の人の体験世界を感じてみよう, DVD.
- 須田雅美, 池田博子, 谷川マリ, 他. (2021). 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う学内実習の効果と課題～老年看護学実習, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 13, 55-63.
- 田端真, 清水律子, 竹村和誠, 他. (2020). 新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと学生アンケートからの考察, 三重県立看護大学紀要, 特別号, 72-80.
- 坪井桂子, 石橋信江, 秋定真有, 他. (2020). オンラインの特性を活かした老年看護学実習, 看護教育, 61 (10), 940-947.
- 安酸史子. (2020). 臨地実習の代替策を考えるうえで必要なこと, 看護展望, 45 (13), 10-14.